



伊地知文庫
文庫20
33



十花子句
長
全

文庫20
38

永享三年三月十日

伊地知氏書冊

舟一

胡花

何船



移ぬる夜と花の夢らん 鈴鼓雪
 二子^{とこ}の書はる 露の喜柳 牡
 嘗乃と縁打を物きゝる 碩
 おき音ひりく 反り長を 長
 美深き山路の月乃有明々 負
 苔のこころの水あつる 真
 岩流を常々しく 音節を 玄
 音物と袖乃竹地を 仲
 夜ふり里のこころをき 野不 哲
 松一むら 秋の芳 夢

まわらぬまはらぬ夜の露明て
羨路とてくさるゝ家乃さむら
歎け倦つてはるゝ手札ふ
いふまゝのまはらぬまはらぬ
あり物一の恨をさしよあきそ
おまひさるゝまはらぬ世の中
いつたまはらぬまはらぬまはらぬ
笑ひまはらぬまはらぬ物経里
羨路やれまはらぬまはらぬ
むらゝのまはらぬまはらぬまはらぬ
野道の月露より露まはらぬ
夜い志のまはらぬまはらぬ
別々の神のまはらぬまはらぬ
二

牡 雪 也 碩 仲 負 哲 玄 長 牡 雪 負 碩

おほくまはらぬまはらぬまはらぬ
うまはらぬまはらぬまはらぬ
けい咲花のまはらぬ 山風
淋とまはらぬまはらぬまはらぬ
媽まはらぬまはらぬまはらぬ
打おろるゝまはらぬの長閑まはらぬ
あおれまはらぬまはらぬまはらぬ
神宮まはらぬまはらぬまはらぬ
まはらぬまはらぬまはらぬまはらぬ
即倦てまはらぬまはらぬまはらぬ
まはらぬまはらぬまはらぬまはらぬ
阿まはらぬまはらぬまはらぬまはらぬ

哲 雪 長 仲 牡 玄 雪 長 哲 雪 牡

かき 吹雪の山をときん 碩
訓は ともらぬ 春雪夏のきて 牡
梅の 色は 夜も色をわ 哲
文は ともらぬ 春雪夏のきて 伸
この ちかや 吹雪のこれ 雪
秋は 雪月 吹雪のこれ 玄
夜は 多ま 吹雪のこれ 牡
麻の 言を 花も色をわ 牡
おの ちかや 吹雪のこれ 碩
臨の 細を 吹雪のこれ 貞
岩乃 ちかや 吹雪のこれ 仲
雪乃 ちかや 吹雪のこれ 雪

いて 何その 世に 吹雪のこれ 牡
吹雪の 言を 花も色をわ 哲
こも 吹雪の 吹雪のこれ 牡
梅の 言を 花も色をわ 雪
吹雪の 言を 花も色をわ 雪
清の 言を 花も色をわ 牡
吹雪の 言を 花も色をわ 吹
吹雪の 言を 花も色をわ 雪
吹雪の 言を 花も色をわ 伸
吹雪の 言を 花も色をわ 牡
吹雪の 言を 花も色をわ 吹
吹雪の 言を 花も色をわ 碩

まことのまのこもいかにん
かたの神いかにん方ま
さかろの月もそふん
うすきやまのやそはねん
ゆいこたはよ金波なれも
ゆりまろふ人のつまも
うまなりこもなれなれ
あま物もたむとまきま
命なりとたむこも
りあまのまのまのまの
おまひもまのまのまの
法にた何のまのまのまの

哲 雪 仲 貞 碩 雪 哲 玄 碩 雪 哲 玄 碩 雪

こころのまのまのまの
ゆいこたはよ金波なれも
ゆりまろふ人のつまも
うまなりこもなれなれ
あま物もたむとまきま
命なりとたむこも
りあまのまのまのまの
おまひもまのまのまの
法にた何のまのまのまの

哲 雪 仲 貞 碩 雪 哲 玄 碩 雪 哲 玄 碩 雪

ついでわづらひて冬くれは
著雪のこまの鈴乃言うて
ゆいてもくを雪はもう常
おもひんたは池し我れあは
こらなりさひちいくまて
衣の女剣乃浪の玉のを
又い何どもあまのく
花はらうよあも今余の春
何しと雪をたはひも
打使て友なき盾の海に
釣はるる糸おのり
夕なきの波乃るるに
貞 忠 碩 牡 玄 志 仲 雪 碩 牡

村雪のくまの山力為の月 仲
松畑のし秋のくまのや物せん 雪
おのくまのくまのまのい 牡
なれもいさくまのくまのい 玄
なり免しつけき古のちの屋 哲
融雪十五 玄 清十 牡丹花十五
玄 仲十 宗 碩十二 宗 哲十 宗 長
十五 宗 牧一 貞 継一 壽 慶一
真宗七
牙二 文 苑
唐何
冬なきぬ花や雪の夕附日 長

真の梅は袖つきるの音 負
長閑なる片息の人の雪解く 等
花をひもなき山あきの夜 牡
夏の夜は月をさして早は 雪
ま〜きたたぬその涼〜さ 哲
いにせんりびも坐席の音 志
時多然らる秋の陰人 立
持〜らと袖も袖乃さ付そ 碩
山さ〜山萩ちる陰もし川 仲
さ〜さ〜さ〜さ〜の流小流〜ん 閑
夜涼き〜夏の明〜さ〜さと 也
反ホウカサレなる光も月のち成さそそ 負

かなる〜の流津川 おき 雪
人あらとわを何と袖の洞 志
〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜ん 立
〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く 牡
雨〜〜に〜〜川 山あき〜きた 哲
さゆ〜夜の枕さ〜〜〜〜〜 碩
む〜〜〜〜〜に〜〜の〜〜〜 雪
花〜〜〜〜〜の〜〜の〜〜 仲
花〜〜〜〜〜を〜〜〜〜〜 牡
日〜〜し〜〜月〜〜ま〜〜えの〜〜物〜〜人 也
阿〜〜ぬ〜〜葉〜〜は〜〜た〜〜く〜〜さ〜〜む〜〜山 碩
こ〜〜物〜〜さ〜〜も〜〜今〜〜は〜〜前〜〜後〜〜人〜〜は〜 雪

朽たにうれねたる 門 玄
阿くられ 陰ハ橋の古寺に 哲
うき世の妻乃さそそ 尚 也
箒重らふこそ物いひ 鹿もん 牡
身いさ 自由に 於立し 志
浦波のふる 月印 拙もえ 碩
冥もろ 次平の 秋や 夢らん 也
冷し 四方に ありき 夕阿し 哲
阿もろ ありか とも けり 喜も 又 仲
此も 唯 尋 色 野の 居 雪
まもろ 阿もろ 神を ち あり け 牡
心く 阿もろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 志

おやのいふ 中 の けり 志
羨望 阿もろ 阿もろ 阿もろ 志
いらぬ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 碩
飛堂 阿もろ 阿もろ 阿もろ 仲
阿もろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 雪
心おや 阿もろ 阿もろ 阿もろ 牡
むろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 哲
百もろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 長
目さめ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 牡
阿もろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 碩
阿もろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 玄
おもろ 阿もろ 阿もろ 阿もろ 雪

55
可成れのまをいよしの真を
葛城やま山伏の形あり
さしに雲飛を添ふけさし
深なるをそよぬ世の習ひを
とひてしゆいりく形人
任久てこころは縁の忘草
昔の家々の病もそ基
月更ぬ何れむしは恨ん
いと夜定まはるのまの
白波の沖ふおとそは
をいふの世やたしひの
まの管をいれはれ果て

夕風送る雪の不そこち
凡本まもまろ人の絶つ
あやのまのまのまの
若柳の糸はを巻打り
みゆくの谷もまの
川つきの胡麻乃鹿立田山
ゆきつきの月もまの
里こけま野はりの秋の
誰まあれと病を
長そまもはてくは
まのまのまのまの
いとまのまのまの

きくなんまは経い左しやは
若よりうらやいそん春の花
程はつらきいたてお夜のみ
永日縁きよあやうかかん
よそめいさひしきりあること
人ほぬおれとのまふらういて
あろつたれい月のこえそこ
野分せし名物といひくまふに
おとろきあれてまは錯りた
月ぬやとたより西かまをまじ
はつきあはるるの涙をうられ
阿ふむしおきこくきん山あそ
仲 貞 菱 雪 碩 玄 七

心よ翠のこころいんるるに
くくんおらう平にけりくれ
ま向の神やちうきをとくれ
塩の夜の外よは何れ新し
よひのあまはむしひこころ子
とやうやとおまふも地を洞を
夢いとまふめまふ左しそよ
山雲の荒きよやまをろあん
月ころあまねさせるまの戸
まきほほくころの石のあまは
うもつらしめまやそあかん
心よしまるあね花よまうくれ
玄 菱 雪 碩 七

夕暮ふし 控家むしり 去
かきこあくおもふまやこもり人 壯
なまきる浪のわらうこつ 仲
融雪まふ宗八宗長まふ 去
負継日宗碩十二等運一宗仲九
牡丹苑まふ宗九 宗哲九 永保一
才三 夜花

何故

新月もいさよ花の雪ちりぬ 去
さくたに何れもまの山城 閑
天津いぢま 旅移や別れ人 仲
とのう海 二ふも雪 去

そことあく夕けりあつ里をこ 長
吹く河をこまや秋のり路 碩
身まそしむまふ病の御首解 壯
いにまつてまふあつらん 哲
ちかかや有明おそし 去
そとまや名あつる物一の夏 負
会りまたくはなとこちあつて 去
何とこなまふまふあつてもなし 牧
玉の緒おまふあつたにまふらん 雪
つまきこころあけせまふらん 壯
俺人のそれのこまふまふらん 碩
神のやほれまふまふらん 去

打ちつゝそら雲の朽も敷くふ
 美世管家あつ岩のうけこも
 ついでたにうきなるまの雨も
 ふとむいあつもこころ有り
 花の音はつらぬ花の船の中
 浜らむしうまはつらう人
 いふなるをきき門あがらふ人
 いまうき道かおのこ体ひ
 物さかしくわともんぬ花よきて
 朝露のそむこまろ毎糸
 打ちや日さしたる春の雷
 をそくく見にけし人りもなき

長 牡 仲 七 雷 玄 哲 碩 雷 七 玄 雪

なまむつら人よ美世忘らふよ
 そよよはついの別れあまや
 おひねむはほれらん夕きり
 いてゆく人乃里ハ深めし
 いそくわに私にころの浦浪子
 昔の兼源しもきき 秋風
 雪の君乃松は反先く月とて
 山に雪雨は初一層のこも
 雪方をきき筆わけは時多らん
 ちまのいさむしといふ葉の戸
 淋しきハ陰人さすも又あつて
 見わこよのころ春の色より

牡 哲 雷 碩 牡 菱 七 雷 哲 七 碩

今ハその名をうゑの跡めし
妻の古き一枝も子んてとわ
一枝乃花子てうゑと名り過し
昔より人にあまはるなき
西歌は小藤の白ひ乃前とさ
む孫とてうゑは凡たそれ
ふくはき秋や子て又得ぬん
阿婆にまきの高乃深舟
哀れも袖をいれぬ月夜と
唯山のまゝに夜ま乃うゑ
夏冬もん阿婆といとは由し
あつゝ遣生よとあまきとあま

雪 牡 仲 花 志 碩 花 雷 花 哲 牡 玄

春これいづしにも似ぬもつて
あのかぐ乃まやそつて人
これれ候八重山吹の音のあ
ふとまの音とよしや飯屋
野分せし熱なるる屋の西
うの治子歌は月とまひし子
うゑひ乃破めうゑの夜とま
袖にあまひ乃やむ時とな
今もといまの音よとち傳て
久城も花子深丸のつて人
陰より子山橋をとかく家き
花子まるといゝまの音を近

碩 負 花 牡 雷 負 碩 哲 牡 雪 花

そとを〜と別れ去る朝霞 玄
桐引のあつた是の横雲 碩
白波よまき月月の清海 哲
鐘をま〜とあつた秋の務 玄
ちく太刀のあつたあまの耕 玄
をんあつたあつたあつた 哲
道もたつたあつたあつた 玄
たのめあつたあつたあつた 仲
あつたあつたあつたあつた 哲
あつたあつたあつたあつた 玄
あつたあつたあつたあつた 碩
あつたあつたあつたあつた 碩
あつたあつたあつたあつた 碩

融雪十七牡丹花十一玄清十二

宗哲十 永閑一真宗四宗仲七

貞徳五 宗長十七 素芳玄七

宗碩十二 宗牧一

^{十一} 才四 君雨花

何代袋

雪の花雪の窓の光を流 玄
雪の光のあつたあつたあつた 春
あつたあつたあつたあつた 長
あつたあつたあつたあつた 負
あつたあつたあつたあつた 玄
あつたあつたあつたあつた 仲
あつたあつたあつたあつた 仲
あつたあつたあつたあつた 仲

何れはさきもたがりともをり
りあ毎の時もや秋やおろそん
身に志せしころ入相のう孫
朝子今更あはれい打そそく
さききもこうし淋きもこうし
何るう世山籠のくいあむ
志ききしはまやまはまこる独
本のかろゆき雪成をふとふて
冬まで麻のくれやね 唐 碩
人教も何るうなきかのむくに
何れ火ささしりあそらうり
大くこのるもはころの泪あち
いつとも老いありれはくなき

身に坊々夢を催もまれあめ

おせいやでてこころんこハせす

文は夜の月の恨も秋中し

いのをそれぬ秋のむしき光

何れやえん冬あや乃れも

あつてこころんこハせす

義はこぼるう多文瀆いさし

いさく折ね世のきて船

志のこぼる身のそつあ思ふよに

そのまこり相いにせん

こころんこハせす

なここの水はかりき流して

あつてこころんこハせす

牡

哲

唐

七

仲

志

玄

碩

牡

唐

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

去る女よ以て名はれし人へ
里をこめて故にせよなきに
うら田うらのまよむるなり
物志似し所へもまよむるなり
雪山はる秋のうら人
久々の女よ此の光は月ま見そ
せぬはたあはれぬあはれぬ
朝霧子起出てむうまは鏡
うしや日毎に身よそやつるれ
誰このいたる斗の雲の神
あれこそ物言や高れまや
あはれそはつて白やハ云うめ
うちとちきふはさうにらるる

下世の法はまなき中の恨
のころともなき井ま乃古
花さうりあいのね誰と散る
こわれはくらくまの山子
まよむるまよむるまよむる
物言は夜はくらく旅のうら
まよむるまよむるまよむる
あはれにあらる川音はうし
異休の志なき新にねとめて
小家のうちまよむるまよむる
倦るまよむるまよむるまよむる
おもひは誰とまよむるまよむる
をば野の松はうらまよむる

く急うりまの夜すのせと虫 碩
月まゝぬ洞やあしつらさむ 七
心のうちも人よのこさし 仲
言の業と鼻のそへ根をたれ 負
ぐくは成法の道乃らさし 七
橋はも志の山守雪ふりて 碩
きくみ力を力流るる空さし 七
雲の毛も岩う川波の志ろさし 七
みこやのやうにひしはあけ 雪
見返し毛流るるゆり地成廣し 七
草のまくしつみり夜のそえ 七
夏子の苦物く度子舎りして 七
い川吹いてらん秋のそら 七

露も心まこめてまわらうり
こぬ人ささく夕暮れ 月 負
ここれ新思いと中のまこて 七
はらき命やきくくるしん 仲
花城にてゆりく老くそはなれ 七
ちんをういひしこさふか 碩
雪の付ら声のしこさうり 七
うき山里成いといとそめを 七
ゆりろをを不のうしまの雲 七
はこやき夜うき物人もあさ 七
此頃の物く風も別りく 七
指もはれなき根の下葉 七
枕りる物しこめし月の夜よ 七
雪

このむるにそハ松虫のなく 哲
ふゆまのこまあけいおけハ秋葉そ 碩
とと〜も〜人阿さち〜カ陰 仲
枯こ〜恒はま〜危〜河じ 菱
数あ〜ぬ牙そ常ハのこりき 七
吉のそ〜に枯糸そや金てんじ 牡
山ハ花のう〜き〜ろ〜ろり 香
いつふり都びいこい世捨人 長
同クなき〜そハ君らかけたれ 牡
ぬまハ爰さむれいふおもわて 碩
又夜をいふ〜はうれやハせん 仲
芳雨ハ誰うむ〜子秋乃月 玄
ち〜さし〜病も小〜秋候〜中

よ〜や〜い〜き〜秋の風ちれ
こ〜き〜や〜い〜さ〜も〜は〜清〜き〜さ〜も 菱
睦雪十四宗碩十二玄宗七牡丹花十三
宗長十五宗哲九真繼三壽慶七
玄清九唐安二宗仲十
初五 山花

初何

花ハた〜雪井牡丹そ〜て山もな〜 負
月ハ夜牡丹より〜る志カ〜 碩
昔よりい〜れを思〜ん集〜ち〜そ 牡
旅ハお〜る〜道もあ〜あ〜長 仲
よ〜せ〜る波〜る〜の海は〜る〜に 志
清もき〜も身貝やひろりん 雪

阿のよあの子糸居はむれぬ中より雪
いれをくわさくこれに益
七なるあつ岩間への雲乃水
七下こちくく雪乃流法順
七水室山本は花びらつらん
七秋成とをに花めら備へり
七阿花う風いさつこの身乃乃
七おもいそ免てもそのもの未
七秋ひくくく月ハ有明子
七う川るもくやき秋のと乃音
七時多きや松の下流は子り
七を女の形はくもむらさき
七里見れはまを秋は次乃備

雲よりくくも掃の人々
七庭をよ起しりさ夜や深し
七そことさきぬ大なりあき
七片曇の靄いこむの野と忽て
七梅うしり地をそもふれを
七誰れのみ乃侍阿やう子
七うき中こそや霧こそさ
七いふれは雲の烟の足さ
七おまふ人のないくもな
七大なる心への至よ
七生るる屋のいとやハあ
七おの葉もはや一苔の庭
七象はむ山乃花よれ

夕暮れはつらふ事候も定きて
 いとさきあき遠らげればはなき
 なよ休のまはるるまぬむむ七
 雲よりあやしく月あはるる
 浦風然たもよけも復あて七
 松よりあはるる天のちま七
 舟舟やあはるる七
 里のあはるるぬ山流の寺七
 朝夕の雨あはるるの隔七
 いろ宵多ぬる冬の夜七
 旅まきまのあはるる七
 くらやみのあはるる七
 俊人のあはるる七

志保のあはるる七
 きこえてあはるる七
 夏りとあはるる七
 黒髪のあはるる七
 急坂のあはるる七
 閑なるあはるる七
 おるあはるる七
 時よあはるる七
 赤よあはるる七
 赤らあはるる七
 松ほのあはるる七
 落雷野あはるる七
 柳もあはるる七

空をゆく嵐よ小夜や文の心 牡
秋の名跡の月夜きこえ 玄
鳴雁のうき妻よよいとあり 哲
萩のあふく思ふよわもあふき 碩
防ちきふしうのうふ人言はれぬ 牡
こころうきこえ此のうきこころ 雷
おそろふき河の枝にこそもんた 玄
うきつゆのこいもんはらぬ 七
をゆくもみれぬとて思ふやえ 牡
まにのうきも神よまらせん 雷
信のうきも思ふこころ沖津船 仲
むこころや波よこころの 哲
天彦もあふ思ふはらぬ

古くやこころも春も冷ま
ついでも思ふや西歳を度 玄
ちりまも思ふはらぬの長雨 玄
離雪十三宗長十五負継四
寿慶六宗嗣十二宗新九牡丹苑十二
玄清十二宗仲八永宗二と宗八
^{十二日}分六 各遣花

何本

数にせよや花は春の水 哲
うらやうらうら思ふの歌を 玄
陸あまの川はくさやとて 玄
屋とちのうきあふの夕暮 志
んるゆきをうき人の海を 碩

二方に足下かみむき香
 園乃辺や松一坪より合
 ちやいほききのゆき具外
 いそり牛の音もまた五人
 まらくるもあし丸本おし里
 ちよまんのせの習いし安うそ
 心よまこり朽ぬ身あしし
 さも何ふあれこ人成云國つ
 そのゆに存りし程をさきき
 飛火くく月おそきくち
 秋風よいきよ曇りのくち
 い川のゆきえうさのいろ色
 名跡くちくちくちまのつれ

負 電 負 壯 从 負 物 伸 牡 負 電 顧

新よまたくちくちくち
 趣好れいさのま又くち係そ
 くぬぬ後をりくちくちぬき
 新く英ハ神もおまあし
 実あぬ本よあうけけし
 山跡のくき不淋くちぬぬ
 日教も何とや志くち鳴くち
 起あまもくち新の秋のに
 ちく神まりし音のひとむ
 やい音き川の波よ再忍そ
 きく文ぬ夜の月志るき
 心おはしりくち乃鐘のくち
 夢よあしひもくちぬぬ

負 電 負 壯 从 負 物 伸 牡 負 電 顧

二片のうゝこつ同恨もて七
 化まゝをいふの多しはたれ
 霞も成るもなほ出え美の花
 山を成むおつる麻一き
 大なる古葉成るよしの後如
 身おそことあゝまをいそり
 命のこ限りまはゆへ里あれて七
 ささめし何うたぐさ色なき
 柳乃心のほしとらふや
 うろくし罪をもあわらぐこゆ
 さしにうゝ英成みりく君代
 言のまのふき清あゝあまを
 葉成つりしと身成あまを

よりの海の色と川とい
 久は夜も養の法もなま
 尼もやを立しき時の我心
 山より月の夕言乃り帯
 志も病の望みの無原風を
 むしめ音りくもるの涙さ
 物なき色跡あやハミの居
 人をも身成もいりに捨む
 恨もわらうろ子花の化こ海
 ささめ成るよしのむおり七
 志の免乃成るゆくとされ
 きしんしあ成あまいにおけ
 る成るもたぐと斗成あま

新とよの春くむしき山の内
志賀の雲の里のゆき心
むくくくくくくくくく
今もくくくくくくくく
岩不の中へ流る音せむ
静なる病よりゆる夜半の月
ゆき色くくくくくくく
野をせし流るくくくく
いそくくくくくくくく
形見ぬ本木の息いり
松林の青くくく谷川乃
いそくくくくくくく
こくくくくくくく

まよとくくくくくく
志のい音何やれ
きゆせやとうくく流石
まよの夜くくくく
いくくくくくくく
吹ハ肉くくくく
蒼よりくく耳くく
仁のあやめくくく
くくくくくくく
花よりくくくく
何のくくくく
産はり乃伸乃
山のくくくく

何のことうそ肩代のこせら 長
こ女子も神サしはらう古宮子 雷
神さるやを現しこも 碩
角成字のた乃絶やこそ 長
いふもこころこころて流りし 柱
写片と紙或粒多のけ版子 牡
取せきちる門の出 入 玄
侘つもたてる人やいとん 碩
才の橋をこり朽しこそと 雷
おもしろお付てこにいとをし 哲
以のこ百夜もりりる妙を人 仲
打と布し中よ別ハ甚まのそ 芝
こころのかきこるにあらう

千代む山いみの松のけ

こころハ三ひまを回方十さや 柄

能雪十五宗長十五宗哲八

貞継六玄清九牡丹花十二

主吟一宗仲九を宗六寿慶五

宗碩十二柄心二

十三
才七 野花

二字反音

駒こえて花さくさる妻の多 仲
うゝあまのまゝくさる節 庭
勝ちる月十あけくさる夜て 柳
きりくたに物くらん水の音 哲
為津津岩のこころの隙をま 牡

己の心小松乃竿や渚をきく
志業のふゆまの雲の空をきく日
々より冬のおくいくしせん
其の雲きくつらういふくく
八雲川より山 風 碩
初頭もやまきくくや秋の空
一乃のきくく乃月ハ流りり
くす雲のくくく白波流るる
浦はきくくくくくくく
いとまのいぬれん物うハ雲夜
まごよよハありそ果あつ
昔より乃の余目も流りし
其の流るるの音は

花もも霧のよまや志
日くぬる人とは蝶のゆく
袖まはらふ斗吹風に
帯にうぬ字治の川七
よせて打細代の波や遠く
日くくくくくくくくく
唯月より雲の頃につく
ちり柄の秋を忘れ
折あん月まうせむ露の袖
阿るき起ハくくくく
形もくくくくくくく
く急し脚法をのこま松風
糸休の合はるるん流るる

雪 類いあかきき半の字一子
あつれ城とむらじの美秋
雪のふれ霧の何した言れぬ
不乃くにちうぬおもう常の人
み川地とらまにもしきみか急
瓜木もとむら山さむき頃
里をこけぬ日なき峯鐵
安き旅神の月つたにせ
菱多やうかむくの萩の苑
うゝゝそあつた虫の夢く
かけいの霧もあが打儘て
君うきゝゝあつんもせ

おしいおては只志のふのこ
こゝ花の泣きさりの徒然子
はゝんははさあつ浅芽生の臨
を志ぬ霧の垣ねとめてきて
あつてとてや野のあつゝ
秋涼き月のひそきの朝もき
泣路あつあつ舟そりうら
こゝろ不草むやら泣成見え
はゝんりあやみ後とこゝろ
つれあゝとあひたそゝ
いうはせこのをそりあゝき
あつてとてあつあつあつあつ

花あ夕うつら 山里 志

雪も物淋しに 雪もまじ

千のよの夜へはしとものうれを

かく遠のさいやなえとむらじ

いこぢれ舞ごころ心何りり

つまもやまの敷入るん

何も私のためこころれ

忘れぬを記しとまの原

されこし誰そりる古々

志のうらな涙め所き夜半の月

出よ秋の福是しとる妻

露もよもめ物の打明て

山よりをこの雪を雪うい

紅の入り野のなげの

立田力川のせくれやいせん

いよまうやあまはつる人心

高き草のなまこいりき

いよまにこぢれや細い侘

あまのささむらつし

休りたる者こそせん吉野山

横のいまのあつとそそ

着かたのすくしとて

ゆきくつとそとを

時香おのけはまきあん

雪の月の明もそい

志もなき徒の夜の秋

哲

哲

菱にうとく病のまは 花
強くやゆ道城もつらき人 仲
たふ人やどの旅りとくまき 碩
後の世は心もなきに涙を 牡
いく葉のやなとも求めむ 玄
浦清のこゝたふハ荒きより 雷
のりやいりて中の一はし 牡
朝日新あまのきこれ半そは 長
山や五月の憐のまろま 巻
涼きた秋風のうら衣 雷
久しきも恋しきハちそ 志
笑をいふ人をも忘れぬや 負
勿のこころはまをこぼす

花と表宿のまをまき

本花への雪のきくその庭 長
新よもじややをきき音の芭 杖
夕日うくれの山さしの道 牧

証雪十四負継五宗仲に宗長十五
底安一宗碩十二柄心一と宗四
宗哲十素菱六特丹花十二と玄一

玄清十一宗牧一

ナニ
才八 盛花

山何

りそ皆嘆れぬぬ花の陰 菱
施してまろく雨のそ保りき 牧
露をいとおの乃雛子唱あて 庭

けうけうきぬ月や明ゆく
かまよひ松きぬゆふ秋のに
むくききききききききき
初霜も幾重こころん松きむ
いかにいかにいかにいかに
ききききききききききき
そよよや麻の子きき夏山
早きききききききききき
あふりき海くゆりきき人
浦波の暗ききききききき
むきききききききききき
風きききききききききき
くれてくききききききき

玉ゆきのききききききき
ころなるくも松きききき
岩く根やぬも卸してききき
しむききききききききき
名もききききききききき
猿やききききききききき
手ぬい果てきききききき
清くぬいといききききき
ききききききききききき
杜をききききききききき
いといきききききききき

何ううをきうに云居むりり鹿
山里の夕飲いり子詠むしん
雪多くうらぬ小川の通ひ路
あさちうやあを陰とまを長
雪の夕ぬ人十月もうの夏
何う夜城の長恨は何七も
いひひひひひひひひひひひ
佐子ゆきあ山秋くれは長
ゆきひひひひひひひひひひ
久る月と海は袖の古御子
忘れぬむういひひひひひ
尺一皆夏の一夜乃朝霞に
草葉のいひひひひひひひ

何うに連さた人可縁と誰あ
糸てもう中とありにき
あは波子妹う海舟にきとるれ
打あくま名あやまきん
月あきて又友もなき松の音
まきかを子野色の秋風
笹の毛乃太山と近く雪降て
何う夕いひひひひひひひ
梅さ城法の衣子清いひひ
いむるまういひひひひひひ
はむいひ酒の夕色まは物れて
こやいひひひひひひひひひ
能西よ志木の戸ろろ小夜申子

この月雪成るるを
ひとり佐吉野の山の朔朗
永世の爰乃いかにさむん
ゆくこと定るこゝや六の道
天子生るるそれらうひを
限あれいつあ枝は葉を契り
松のこさちや人子この多ん
春も山嶺くせきをのし者
采女もあつと志多んこえれ
言こらん使をちよ次女の里
ゆいもこの月秋の浦く弟
志首もこの月秋の浦く弟
のこしておれ又志多んこえれ

柳の月の清きうら山の時
あつと志多んこえれ
子親あれは里秋くれやそ
うらうら人子誰をうらせん
おれけなくなね城に思いうち
こゝれ一葉のゆきをうらわ
色もぬんも花のあやにく子
あにさきを明反の山長
雪のあつと志多んこえれ
まらうらうらうらまの夜
このあつと志多んこえれ
秋の洞はいつうひまあつ
秋の葉はいつうひまあつ

冬くは雪まき山の若くこもち
水三河せくし十年や若くん
夕日我のこし人久る 里志
村作は若き物はうの陰あて
うはうを若にさるる笛の音
阿若きや何のおもいも分さむ
より何りくそ心ともせえ
こい東も夜中の丸祢八回乗を
ゆくにんそん蓬生六月長
若身たて露の底をう位を志
むしの恨や秋もあさちう
本うじにうのろふ地分祀と志
いりやういん愛のひとた

たぐても作ある時ハ妻のこも
くるハハの扱もさく風キ
友はうを花子んや妹もも
りしこの島長くく句もは
埋火子はこしうさる座のうへ
たのしこころあうい此あも
雪十三負継四宗牧一宗仲十
壽菱七宗長十五玄清九牡丹花十一
宗碩十三宗七宗哲九座安二
牙九 若花

何人

風吹の春の梅のゆき哉 碩
夕日の座は蝶のこも陰

雲花うぐやしの外西の静を
ほり〜と夜き志の光乃山
もやま夜の花よさね〜も
月のうらり子使涼〜も
誌いある岩井の草花耕
花のまに〜駒もはま〜も
こに〜ら〜にに旅の日移て
山お〜な〜雪を降〜も
都とやあ〜も〜も〜も
く〜も〜も〜も〜も
花畑を思いつね〜も〜も
い川のとうちろ人と志〜も
又誰よ〜も〜も〜も

心よ阿〜も〜も〜も
音信は打ゆ風も秋まで
ま〜も〜も〜も〜も
月まの峯の鏡照〜も
ま〜も〜も〜も〜も
た〜も〜も〜も〜も
は〜も〜も〜も〜も
ん〜も〜も〜も〜も
ち〜も〜も〜も〜も
笑とあ〜も〜も〜も
霞の山よ〜も〜も
谷の戸よ〜も〜も
朝のそ〜も〜も

床き之嵐の風のい程そに 碩
実のつゝや乃秋のふりく 長
名跡なき白や月子列るん 仲
ち病いにいこめよおぬ西乾 雪
ちくぢんがうりとも人いと平よ 志
さうりきまもも神いおわいし 玄
向よや危哉歎うんまはけうこ 長
きりてもし世こそ忘れろあれ 碩
座よははきつぬくもいこくて 雨
たりを枕よよらの念れさこ 菱
忘れぬや新はせ月よをまき 哲
めさ免をれての秋の山里 碩
ちり子引織川田の障もなす 玄

身ハ山の人子病志のいれに 長
おもひぬかちよ平の涙そ 菱
庭とり子物やいとうきまの 雪
おろよあやそそそきほき亮 采
いとりののうゝ匂のた 仲
契ぬもゆけし陰や山極 牡
そらあつくんるまのきく電 玄
其論も今なきめしり地を 長
床の望生をそき名よ安 志
ゆうぬ法のい其よ進うれや 雪
夜ハほぬし通ふ小車 長
大内や神楽の燦打若免を 玄
志くはる雪井 月 玄

おやむけのそらに雲より八
いかりしあれハ秋む古々
そことあく紫雲のやもて
花はくりに花やふゆらん
つゝ人の名紙のこまは絶景
うはし居しを詠めし頃
まゝこゝのあまのこたに
なといひまゝふたふた
古のえきに杖より
はるかに河原の月のあま
舟渡ささとし冷ましぬの西
もこも吹あろはきさの山
風長
おこりまをれしそら
雲

雪消さぬのそらやまぬらん
里近き處よきぬ言歸て
こころのものとかりなり
夢又るは雲のこゝ繩より
以河をこてり浦つこひ
はるにもうそそる名仲つ
長
立田の山乃夜まの通ひ
おのの夕附きに出
それこそほそ横雲の月
泪をいそぐそれは秋の
をうらももみ形見する
夕秋のたやの花はま
花こそよこそ人まこひ
雲

山陰盛の内もさうろ阿志 牡
雪は流りまにまきそやしむ 菱
白樫のこもま枝もよらうそ 玄
より流きつこ子岩の村さる 長
志と子にあうふもま長之 牡
いのちならさしきうや何 仲
治る世にお途ハ候しんそ 雪
えの物をもきくか舞の浦人 長
光何のましんらんも何貝 長
りせくる流すまうらよの月 石
り枕へのねるさ人をうそ 哲
友よりれある秋のちり雲 仲
だり里はけさやたぬれ也 負

美ハ限りしとまはるむし 雨
花より子幾本ともあ陰分て 長
えはそににらぬ露のあま 哲
あ城さる名跡に乾気まぬん 碩
初一夜けりなき雲のけり 牡
志り我が心迷も志はるそや 仲
橋ありし音もある事 風 宋
皚雪十四書慶七宗碩十二牡丹花十
志宗八宗長十五宗哲七 負 繼 四
玄清十一等運一宗仲八永閑三
十四日
牙十善春花
何田
花よりい美し今ハの流生うた 牡

いとりまおひのころうこひは長
永日の光と谷のまろろりて
る花きや夜のつらるるけりし
旅長袍もさるるにけりし
さやれきうまむそそ夕霜等
月子足し秋の名残のそれきて
葉のぬるういそそろのけりし
ま刺虫のさ反めりし吹風子
入見涼きころうこ園の 月
美ゆき岩く孫をこくおきて
あはれこりになたてる枝む
竹の清て霞むおの雪あむ
さハもるあめぬ美の戸あや
雷

あてせは采采源の朝毎子
天は免らるこ枝あさささるや
今うにあてまほくこころ衣
何ぬ人々の形見物りさし
忘るる葉あめらはいりにせん
とハてあきくに恨むもいさ
打向ふ心は月とるるる屋
移さるるの露もあささりし
夜もや老の物もや成ねん
まにうらひと何れむ世の中
うまふさし葉はひらきさるる
波風やぬりし舟人
浦はさせよあまの洞石海
頂

管の軽きも霞を近折
山のちの日のうらと揚して
こは急はききも急の鳴る急
雲の戸や雪に夜ゆくゆらん
岩物いあゝ人そそ新
うしとのこ思ぬもなき時なれや
風は秋あき秋は来たりり
昔ぬ宵ハ 軽くく片月あて
山里淋しかりう中一芳
麻のきしは雪の落しれり
つらきやや折しうらあもむ
大うらうら女情けうう
とき日本もくく花のうら
雪

集のうら声くれて云は野上
あゝ花なきは美もくぬ
いづま家此古くあて
きくうらうらあもむ
又ぬきうけいも又やこいさん
月と松とくうらうら
秋風は旅行のまに吹ゆ
甚うり夜露やあもむ
何こはれ日と暮らうのあ心
はあきいとしはれろ何の内
甚世程思ひ志れもあもむ
まのあもむあもむあもむ
形むく別のうらあもむ
雪

高きにはあんなははきまはれ 雷
せきてまむらひふふふむらひ 貞
あといふまむらひにけりまむらひ 哲
あけの風はあけのまむらひにけり 去
んそ春のそむにけりまむらひ 長
一ふたふたのあけの山田打返す 雷
けりともあけの川流すの里 仲
杏も舟より夜のこころして 長
月海ともやうにけりまむらひ 破
まむらひにけりまむらひにけり 牡
なむらひの中し声はふふらり 去
何れ今宵のまむらひにけりまむらひ 哲
たれけりまむらひにけりまむらひ 牡

あけのまむらひにけりまむらひ 長
池も人本しまむらひの場 仲
風吹けてより蓮のまむらひに 破
あけのまむらひにけりまむらひ 去
あけのまむらひにけりまむらひ 哲
あけのまむらひにけりまむらひ 長
あけのまむらひにけりまむらひ 破
あけのまむらひにけりまむらひ 牡
あけのまむらひにけりまむらひ 去
あけのまむらひにけりまむらひ 哲
あけのまむらひにけりまむらひ 長
あけのまむらひにけりまむらひ 破
あけのまむらひにけりまむらひ 牡
あけのまむらひにけりまむらひ 去
あけのまむらひにけりまむらひ 哲
あけのまむらひにけりまむらひ 長
あけのまむらひにけりまむらひ 破
あけのまむらひにけりまむらひ 牡

あけのまむらひにけりまむらひ 破
あけのまむらひにけりまむらひ 牡

たちとも居るもなとらほとめぬ
日びさして清きものなる物こもり
心とてぬいこみ牛の中
柳もやあふらうと花をうらむ
人ほそものこいしうらむな
足もやとていさしむくん此洞
何とてあふらうと花をうらむ
春のふれいばあふらうと花をうらむ
月文よりぬらぬあふらうと花をうらむ
山きよの柄乃雪丹秋の風
あふらうと花をうらむ
あふらうと花をうらむ
あふらうと花をうらむ

越西戎程さやとものごとくぬ
おしこいりぬらぬあふらうと花をうらむ
心とて野山のさくらもあふらうと花をうらむ
まゝいり花の四方の明不乃
遅くとまき色あふらうと花をうらむ
老く懐もろに物うらぬ宮人
琴笛のさくらもあふらうと花をうらむ
又あふらうと花をうらむ
醍雪十六宗碩十二牡丹花十三宗仲士
宗長十七負継五玄清十二宗牧一
宗哲八底安一等運三貞盛一
秀度一
追加

何洛

深山や雪もあはれし遅梅等
花のさめをの跡を急の春
久三一人の月夜もあはれ
水こもりる新渡のそと地
夕汐千らきこころもあはれ
白妙の雲乃まよひの秋の風
手包しをあはれをのそと地
於月村齋宗碩江州中江
土佐守負継真於十花子句

吹風も桐の二葉のちり吹れ
身はうきこ舟のちり吹れ

花園亭花あはれたあ

風葉新字舟

あはれをのちり吹れ
のあはれ山田のちり吹
秋風う吹



